

## 万寿子さんの庭

黒野伸一

竹本京子20歳、杉田万寿子78歳。赤の他人で、しかも半世紀以上も歳の離れた二人がおかしなやりとりを通して仲良くなっていきます。表紙のアマリリスとどこかにありそうな街の風景が描かれたかわいらしいイラストに惹かれて、手にとった本書ですが、終わりが近づくとつれ、どこか寂しさを感じました。物語が終わる、それは、二人の別れでもあることが予想されるからでした。

前半は、万寿子さんが京子とのきっかけを作るため、さまざま嫌がらせをすることに少しいらいらしていました。しかし、万寿子さんは、京子と出会ったことで、自分が長い間、人と関わらずに生きて来たことに気づきます。78歳にして残りの人生を思い、自分を変えるために京子に近づいたのです。京子も万寿子さんを通して、変わっていきます。万寿子さんのひとつひとつを丁寧な、そして楽しんで生活している姿に、自分の生活を反省し、ずっと気にしていた右目の斜視、父親との関係など、自分が抱えている問題に正面から向き合い始め、そして、このままで良いや・・・と思っていた人生も自ら変え始めます。どこかにいそうな、いなさそうな、どこかで起きていそうな、起きてなさそうな、そんな感じが良かった。そして、人は、人に出会い、言葉を交わし、生活をする事で、こんな考え方が変わり、人生も変えることが出来る。私も、人ともっと関わりたい、人の中に入っていきたい、と考えさせてくれた本でした。

C・Y



小学館

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞